平成２３年度　学位（修士）論文要旨

社会システム研究科　文化言語専攻　渡邉　壽康

「エドガー・アラン・ポーの一研究：伝記と自我の問題について」

ポーほど、破天荒で毀誉褒貶の激しい人生を送った作家もめずらしいであろう。伝記作家のジェフリー・メイヤーは、「ポーの作品中の優れたものは、彼の人生と同様に面白い」と多少逆順的なことを言っているが、ポーは、伝記作家にとって、食指を動かさざるをえないような魅力ある人物であることは間違いない。

２歳で両親を失う不幸な生い立ち、飲酒癖、アヘン常用の疑い、放蕩、養父との確執、退学や放校、家出、いわゆるマザコンに起因すると思われる女性遍歴、その一方で性的不能の可能性が大であるという不可思議さ、１８歳から終生続く極貧生活、１３歳の従妹との結婚、人間関係のトラブルによる失職・転居の繰り返し、嘘つき・借金王・気違いのそしり、今なおはっきりしないその死の原因等々、およそノーマルとは言えない事実や噂の数々は、枚挙に遑がない。

片や、神童と呼ばれた幼少時からの文才や運動能力、短いバージニア大学在学中の抜群の評価、陸軍一兵士としての出世、難関陸軍士官学校への入学、複数の雑誌社における寸暇を惜しんでの編集者としての超人的な働きぶり、彼の功績による購読数の飛躍的アップ、その間において多数の詩や短編の発表、妻や義母を慈しみ、「ポーは物静かな紳士であった」との知人の証言など、前段とは全く逆の趣を持つ一面があるのである。

どちらのポーが本当のポーなのか。ポーという人物を定性的にどう位置づけたらよいのかを彼の短編作品を通じてつきとめたいというのが、本論文の主旨である。

ポーは、推理小説の発明者であり、ＳＦ作家の先駆けである。メルヴィルの『白鯨』に影響を及ぼしたといわれる『アーサー・ゴードン・ピムの物語』を書き、ボードレールからは、「文芸の片田舎であるアメリカにはもったいない天才」と評された。フロイト登場の半世紀前の人物でありながら、フロイト学派の心理学者たちの格好の分析対象となった。ポーと同時代の作家たちの作品を、一般大衆が読むことがほとんどなくなってしまっている今日、ポーは、今なお全世界に若い読者を持ち、ギンズバーグなどの現代詩人やルウ・リードのようなロック歌手に

まで、影響を与え続けている。

これは、ポーの持つ「現代性」に起因するものであると考える。前述の一見想像を絶する奇天烈な人生は、当時のアメリカではまさに字義通りのものであったであろうが、我々現代人から見ると、それほど「奇天烈」には思えない。それは、本人は当然気づくはずもない、時代を超越した「現代性」を彼が持っていたからだと考える。

さて、オットー・ランクは、『ドッペルゲンガー（分身）』の中で、「多くの『分身』をテーマとする文学作品は、多分に自伝的なものである」と述べているが、この逆もまた成り立つのではないだろうか。つまり、「自伝的文学作品は、作家と主人公らの『分身』物語といえるのではないか」ということである。ポーの短編には、自伝的な作品が多く見受けられる。なかでも『ウィリアム・ウィルソン』は、自伝的要素を最も色濃く持つ作品のひとつであろう。上記仮説に従えば、この作品は、作者ポーと作中登場する二人のウィルソンとの「分身物語」である。ポーは明らかに、分離した自我（self）を持っていたように思われる。分離した自我、すなわち複数の自我の相克がこの作品の主題である。ここでは、いわば「ならず者の自我」と「良識の自我」の相克であるが、本論文では、ポーにおけるそれらの自我(self)の相克の内実を考察した。

ポーの数あるジャンルのうち、「美女の死の物語」は彼の独壇場のジャンルである。夫と妻の物語であるこれらの作品にも自伝的傾向が濃厚に見られる。そのうちの『ベレニス』、『モレラ』、『ライジーア』、『エレオノーラ』の４作品を取り上げて、これらの作品が持つ共通性を探った。彼が「マザコン」であるという仮定から導きだせる、美女への非性欲的憧憬と劣等感だけではなく、アメリカ南部の貴族意識や女性蔑視を含む、ポーがある一面で持っている「アメリカ南部男」としての身勝手さをも垣間見ることができるし、ポーとその妻バージニアとの、この二人ならではの愛情関係もわかってくるのである。

ポー作品とポーその人自身の、他に類例を見ない精神構造の中核は、彼の短編のひとつのタイトルとなっている『天邪鬼（“The Imp of the Perverse”）』である。ポーによれば、「してはならないと重々承知しているにもかかわらず、そのしてはならないことをあえてしてしまうねじれた心理状態」を「天邪鬼」という。その「天邪鬼」を投影した作品のうち、やはり、自伝的雰囲気を多分に含む『黒猫』を取り上げた。主人公はその天邪鬼的性向ゆえに愛猫を殺してしまい、妻をも手

にかけてしまう。本作品は、ポーの妻バージニアが喀血し、死に至る病であるとポー夫妻が暗鬱な自認を行った直後に書かれた。また、ポーは大の猫好きで黒猫を飼っていたと伝えられる。ここにポーの悲しくすらある「天邪鬼」ぶりがいかんなく発揮されていると考える。

ポーは、自身の「天邪鬼」を抑えることができたなら、少なくとももう少し経済的、社会的に有利な人生を送れたはずである。しかし、それができなかった。しかしながら、また逆に、それができなかったからこそ、２００年近くも世界から忘れられることのない作家となったという「栄光」を得ているのだと思う。